

Japan Patent Office
Patent Laying-Open Gazette

Patent Laying-Open No. 50-124935
Date of Laying-Open: October 1, 1975
International Class(es): C09D 5/00
C09C 1/62
C09C 3/10
C08K 9/04

(6 pages in all)

Title of the Invention:

Patent Appln. No. 49-32775
Filing Date: March 22, 1974
Inventor(s): Hiroshi NARUI and
Terumi SHINOHARA

Applicant(s): OIKE KOGYO KABUSHIKI KAISHA

(transliterated, therefore the
spelling might be incorrect)



公開特許公報

⑪特開昭 50-124935

④公開日 昭50.(1975) 10.1

②特種暗 49-32775

②出願日 昭49.(1974) 3.22

求 未 求 (全6頁)

庁内整理番号 714247

6847	48
6737	48
7142	47

⑤②日本分類

⑤ Int. Cl.

COPY 5/00

C09C 1/62

C09C 3/10

COXK 9/04

發行所

[illegible][illegible]

しかしてかかる粉体塗膜に用いる粉体塗膜用

一、此項工程，係由本局派員，分赴各縣，調查各縣，
 之教育經費，及各項教育設施，並由各縣教育局，
 彙報本局，以便彙編，呈請省府，核辦。

總編輯 吳人平 日 以 小 名 為 誌 謝 影 謝 覽 心
 編輯部 之 處 設 在 和 順 廣 源 號 之 第 二 樓 上 可 以
 編輯部 之 處 設 在 廣 源 號 第 二 樓 上 可 以
 十 日 以 來 諸 位 諸 君 幸 甚 幸 甚 幸 甚 幸 甚 幸 甚

[illegible][illegible][illegible][illegible]

(15) 用ゐる建築材料の金額が少なくて済んでゐるので、少減して所算の金額がたえられ、金額減少を考慮して算用することによる建築費率の低下を防ぐことができる。

19. 鐵道部令ハ、十一月廿三日付に該部頒布の「鐵道部令ハ、十一月廿三日付に該部頒布の」

(7) 憲法の改正は、法律の制定に準じて行われなければならない。従つて、憲法改正案は、衆議院及び参議院の各三分の二の過半数で可決されなければならない。

[illegible]

(3) 國産炭は、その品質が、輸入炭に劣るものが多いので、炭質の改良に努めて、輸入炭に劣らぬものを出産することである。

この等式は、 α のノズルの面積が一定である。

[illegible][illegible]

一、本會之宗旨，在於研究我國經濟，以謀國家之富強，及國民生活之改善。凡我會員，應各盡其力，以達此目的。

割合が50%を超えるとコーティング樹脂層の耐食性が低下して、金属腐食を促進するための材料と見られる。金属腐食が促進しやすくなり、さらに液体状態での使用時の製造に与える一般的なブレンド法である液体ブレンド法が適用できなくなるので好ましくない。

かかる用途の性状を有する金属腐食剤は、たとえ微量のものを方法によって液体に溶解することである。

すなわち、ポリプロピレン、ポリエチレンなどのベースフィルム上に金属腐食可能なアンダーコート層（グラビメーション方式、ロールコート方式など、その厚さが0.1~2μm程度の厚さに塗布する）を設け、これに金属の腐食に応じて腐食速度 10^{-4} ~ 10^{-6} トール/年、腐食深度200~2000μm程度にわたって厚さ0.05~0.1μm程度の金属を溶解せしめ、さらにその上にトップコート層（アンダーコート層と異なる樹脂を用いてもよい）を設け、かくして与えられた金属腐食剤層（ベースフィルム一体構造）から金属腐食

剤を溶解して回収し、ついでこの腐食剤を析出することによってえられる。

前記コーティング樹脂としては、熱硬化性樹脂と熱可塑性樹脂を前記範囲内で混合したものが用いられ、前者は腐食剤を溶解するようにその溶解性または不溶物がベースフィルム上および腐食金属膜上に溶解される。前記熱硬化性樹脂としてはたとえば熱硬化性アクリル樹脂、エポキシ樹脂、フェノール樹脂、エリブ樹脂、メラミン樹脂、アルキッド樹脂、不飽和ポリエステル樹脂、ジアリスフタレート樹脂、ポリウレタン樹脂などが用いられ、熱可塑性樹脂としては塩化ビニル樹脂、塩化ビニル-酢酸ビニル共重合樹脂、ポリビニルブチラル樹脂、ポリブチル樹脂、アクリル樹脂、熱硬化性樹脂、ロジン、ロジン変性樹脂、ソルナック、石油樹脂などが適宜用いられる。なお前記熱硬化性樹脂の硬化はあらかじめの樹脂において進行せしめられている硬化剤にしたがって行なわれる。

また前記コーティング樹脂層は必要に応じて

腐食剤としてよく、このほかに腐食剤の色を有する金属腐食剤がえられる。腐食剤としてはアミン系、ナフタリジン系、アゾレーキ系、ポリアゾ系などの陽イオン性腐食剤または陰イオン性腐食剤が用いられるが、腐食剤の点から腐食剤の使用の方法とくに好ましい。

腐食剤として用いられる金属としては金、銀、アルミニウム、銅、ニッケル、スズ、クロム、炭素などが好適に用いられる。

腐食した金属腐食剤の形状はカーネル、ペンマーカー、分岐腐食剤などの形状の形状によって行なわれる。与えられた金属腐食剤は光線照射を腐食剤の使用によって前記した点とをよむが、1~500μmの範囲内で腐食分解され、またはそのままで用いられる。

本発明の金属腐食剤は液体状態の金属腐食剤を溶解用として用いる液体腐食剤をよむその他の腐食剤（腐食剤が熱硬化性樹脂の硬化剤に代用する）とともに液体腐食剤したの点を有する（液体腐食剤ブレンド法）、あるいは

はすでに腐食剤とされている液体腐食剤とを混合する（ブレンド法）して製造される。

金属腐食剤の使用量は与えられる液体腐食剤の使用目的によって腐食深度にわたるものであるが、用いる液体腐食剤に対して0.1~30%をかんじくする10%の範囲内で用いるのが好ましい。金属腐食剤の使用量が0.1%未満の場合は、腐食剤が金属腐食剤で全面に腐食されず金属光沢が失われるため好ましくなく、一方30%を超えるとそれ以上の点とをよむが、金属光沢がそれ以上と向上しないので用いる腐食剤があまりなく、しかも腐食剤の性状が低下するので好ましくない。

前記液体腐食剤としては腐食剤の液体腐食剤使用目的にわたる点とをよむが、これらを例示すれば、たとえばエポキシ樹脂系、熱硬化性アクリル樹脂系、不飽和ポリエステル樹脂系、ポリウレタン樹脂系などの熱硬化性液体腐食剤とよむポリ塩化ビニル樹脂系、ポリエ

用いてリン酸亜鉛下地処理した厚さ1.5mmの銅板に厚さ100Åを蒸着し、ついで220℃で15分焼成つけた。

前記焼成時においてはなんらのトラブルもなく、えられた薄膜は金属膜料が均一に分散された透明な緑色の光沢光沢を呈し、耐熱性、耐薬品性、耐腐蝕性などの優れた性能もすぐれたものであった。

6 前記以外の発明者

住所 京都府城陽市寺田字今堀72
氏名 菅原 昭 巳

特許出願人 尾池工業株式会社
代理人 弁理士 朝日 泰 京 太

手続補正書(自発)

説明書の綴

昭和49年4月27日

6 補正の内容

特許庁長官 菅原 昭 巳 殿

(1) 本発明明細書11頁15行の「 10^{-6} 」を「 10^{-2} 」と補正する。

以 上

1 事件の表示

昭和49年特許第32775号

2 発明の名称

光導性客本装置用素子

3 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 京都市下京区仏光寺通西洞院西入木崎山町177

名称 尾池工業株式会社

代表者 尾池 孝 三

4 代理人

住所 大阪市北区鶴町2の28 新千代田ビル

氏名 (6522) 弁理士 朝日 泰 京 太

5 補正の意義

本件明細書に添付する明細書の「発明の詳細な

(1)